様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１７３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５９３２９８

研究課題名（和文）発達障害児の性発達支援プログラム開発に関する研究

研究課題名（英文）A study of a sexual developmental support program for children with developmental disabilities

研究代表者
宮原　春美（MIYAHARA, Harumi）

長崎大学・医歯薬学総合研究科(保健学科）・教授

研究者番号：００２０９９３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：1.発達障がい児デイサービス利用者の中高生16名の子どもを対象として、プログラムを開発した。内容は大人になるからだ、プライベートゾーン、わたしの場所とみんなの場所、恋愛、安心できる距離等で構成した。実施時間は2時間程度でピア・エデュケーションを応用した。視覚教材やロールプレイを用いたことが有用であった。職員もプログラムに参加することで，教育方法がわかり，プログラム内容を記載した学習ノートを渡すことで，学習の継続が図られた。
2.発達障害児の性発達を支援するためのネットワーク作りのために、「長崎“障がい児・者の性”を考える教育研究会」を平成22年9月に発足し、その成果をHPと通信で発信した。

研究成果の概要（英文）：We developed a program for 16 junior and senior high school students who use day health care services for disabled children. The program included the following topics: Body becoming an adult, Private zone, My personal space vs. your personal space, Love, and Distance that creates a sense of security. This program took about two hours to be completed. It employed peer education. It was useful to use visual aids and role playing. The staff could understand appropriate sex education methods by participating in this program, and continuous learning was planned by distributing a notebook in which the contents of the program were described. For networking to support sexual development in children with developmental disabilities, we established the Nagasaki Education Society for Study of Sex in Disabled Children and Adults in September 2010 and presented its findings on our website and newsletters.

研究分野：発達障害看護学　思春期学

キーワード：発達障害　セクシュアリティ　性教育　プログラム　ピア・エデュケーション　性行動　思春期

１．研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで知的障害児や自閉症児・者の性教育の実施状況、保護者らの認識を調査し、保護者は我が子の性発達・性行動に戸惑いや葛藤を感じていること、学校や療育現場では必要性を認識しつつも系統的な性教育はあまりなされていないことを報告している。

一方、性教育の方法論としてピア・エデュケーション（仲間教育）が世界的に注目され我が国でも多くの自治体で実施されている。研究代表者はこのピア・エデュケーションを12 年前から地域で実践し、思春期糖尿病患児の性教育にピア・エデュケーションを応用しその有用性を確認している。さらに自閉症児・者の保護者の認識と保護者から見た性発達、性行動の実態と問題行動の調査を行ない、自閉症児・者の性発達は生理的には定型発達児と変わらないことを確認している。しかしその行動特性から来る性的問題行動に母親達は悩んでいることも明らかになった。

２．研究の目的

発達障害児の性発達・性行動については、障害の程度と関係なく通常の発達をする事が明らかにされているが、彼らの行動特性から性的問題行動を起こしやすく、社会不適応を招きやすい。

しかし、我が国においては発達障害児の性発達を保障するための研究はほとんど行われていない。

そのため本研究の目的は発達障害児の性発達支援プログラムを開発するとともに、専門家が彼らの性発達をサポートできるためのネットワーク作りをすることである。

３．研究の方法

1）プログラムについて情報収集し、我が国で実践可能な発達障害児用個別および小グループ性教育プログラムを作成する。小グループ用プログラムにはピア・エデュケーションを用い、また遺伝教育プログラムも発達障害児用性教育に応用する。

2）作成したプログラムを試行的に実践し、評価を行う。評価には発達障害児の療育・治療を担当している作業療法士、臨床心理士、精神科医と共に行う。評価結果を基にプログラムを修正

3）思春期・青年期の発達障害児用性教育テキスト、ＤＶＤを作成する。

4）発達障害児・者に関わる専門職者（作業療法士、教師、臨床心理士）の研究会を立ち上げ、性発達を支援するシステムの構築について検討する。

４．研究成果

1）特別な支援を必要とする中・高校生に対する性教育のプログラムの開発と実践について

（1）目的：特別な支援を必要とする中高生の性教育プログラムを開発し，実践する。

（2）研究方法

対象：障がい児デイサービス利用者で特別な支援を必要とする中高生 34 名のうち，性的問題行動があることから教育・支援が必要と職員が判断した 16 名の子どもと職員。

（3）結果

プログラム開発について：特別な支援を必要とする中・高校生に対する性教育プログラムを開発した。本学学生によるピア・エデュケーション（PE）の方法を用いた。

プログラム
＜展開 1：大人になるからだ＞ ・「ひろちゃん・ゆうきちゃんパネル」を用い、男女の違いと二次性徴について
＜展開 2：プライベートゾーン＞ ・プライベートゾーンの具体的な部位とプライベートゾーンとはどういうところか
＜展開 3：わたしの場所とみんなの場所＞ ・プライベートスペースとパブリックスペースについて ・プライベートスペースでのみ行っていいことについて
＜展開 4 ①大人になるこころと約束（恋愛メーター）＞ ・恋愛感情について ・恋愛の約束と大人の約束について
＜展開 4 ②：大人になるこころと約束（安心できる距離）＞ ・人との距離の取り方について
＜展開 5：まとめのロールプレイ＞ ・展開 1～4 をもとにしたロールプレイ
＜修了式＞ ・修了証書とプログラムで勉強した内容をまとめた「からだノート」を渡す。

評価：全体として PE で行うことでより学びやすい環境を作ることができた。絵を多く取り入れた教材やロールプレイを用いたことが有用であった。職員もプログラムに参加することで，性教育の方法がわかり，プログラ

ムの内容を記載した学習ノート渡すことで，さらに学習の継続が図られた。

2）特別支援学校寄宿舎における性教育プログラムの検討

（1）目的：特別支援学校寄宿舎における性教育プログラムを開発し,実践・評価する。

（2）.研究方法

対象：A 県教育センターが主催する寄宿舎指導員等研修の参加者のうち同意の得られた 61 名

実証的研究 :前年度試行的に実践したプログラムを改良して開発・実践

調査研究：対象者に対する質問紙調査

調査に関しては長崎大学医歯薬学総合研究科倫理審査会の承認を得て実施した.

（3）結果

プログラムの内容と目的

展開1 ＜男女の違いと二次性徴＞	第二次性徴と思春期の身体の変化を知ることができる。男女の身体的な違いについて（特に性器）考えることができる。
展開2 ＜プライベートゾーン＞	プライベートゾーンと清潔について学ぶことができる。
展開3 ＜好きとラブの違い＞	家族に対する愛情と、異性に対する愛情の違いを含めて、ラブ（恋愛感情）について考えることができる。恋愛のルールがわかるようになる。
展開4 ＜わたしの場所とみんなの場所＞	わたしの場所（私的な場所）とみんなの場所（公共の場所）について学習し、社会的なルールやマナーについて理解することができる。
展開5 ＜いいタッチ・悪いタッチ＞	人とのふれあいには心地よいものと不快に思うものがあることがわかる。 人との適切な距離の取り方について学ぶことができる。

評価

今後実践できると思うかという質問に対して,展開 1,2,4 は９割以上,展開 3,5 については８割が実践できると評価していた。

3）遺伝教育プログラムの開発と評価

（1）目的：我々は米国の遺伝教育プログラムを翻訳し，さらに日本の文化や子ども達の興味を考慮して改変した独自の遺伝教育プログラムを開発し，2004 年より一般市民や子ども達を対象とした公開講座で実践をかさねている [1) 2)]．本プログラムは発達障害児が唯一性、多様性を理解する教育プログラムとして応用可能と考える。

(2)研究方法

対象：N市内の小学校高学年とその保護者

方法：参加型学習プログラムを取り入れ，受講者が楽しく学べることをコンセプトとしてプログラムを構成した。

プログラム
始まりの会（20 分）：オリエンテーション・自己紹介，連想法によるプレテスト
1.PTU の味（30 分）
2. 特徴探し（20 分）
休憩
3. 遺伝の木（35 分）
4. 特性ゲーム（10 分）
5.まとめ（５分）
終わりの会（10 分） 連想法によるポストテスト・修了式（20 分）

講座の開始前と終了後に自由連想法調査を用いて評価した。調査に関しては長崎大学医歯薬学総合研究科倫理審査会の承認を得て実施した.

（3）結果

①受講者の背景：小学校 3～6 年生 19 人，保護者 9 人であった.

②評価：子どもの結果では講座受講前の反応語数は 58 であったが，受講後は 94 と増加していた．またカテゴリー数では受講前 4 から 7 へ増加し，その内容も「多様性」「唯一性」といった受講前にはなかった今回の講座の主要概念が受講後には反映されていた．エントロピーは 5.362 から 6.004 となり，遺伝に対する概念の広がりがあったものと思われる．保護者の反応語は 66 から 57 に減少しており，エントロピーも 5.62 から 5.482 と低下していた．しかし反応語の内容では子ども達と同様に「多様性」「唯一性」のカテゴリーが追加されていることから，学習目標に沿って概念が集約されたと考えられる.

自由記述：子ども 18 人，保護者 8 人から寄せられた自由記述を KJ 法で分析した．子どもの記述では「遺伝についてよくわかった」が最も多く見られていた．また「遺伝は意外に簡単だった」という記述もあり，遺伝に対する難しいというイメージが軽減されたことがうかがわれた．保護者では親子で楽しく参加できたことへの評価が見られ，講座の主

要概念である「唯一性」についても多く述べられていた．以上，単一自由連想法と自由記述の分析から，遺伝教育の本質であり，また我々の講座の主要概念でもある「唯一性」と「多様性」については受講者に十分伝わった．また講座実施中の受講者の様子や自由記述の分析からも単に遺伝の知識レベルに働きかけるだけではなく，参加型学習を通して楽しく学ぶことができ，その結果として遺伝に対するイメージの変化も見られ，発達障害児の教育にも十分応用可能と考えられた。

４）研究会の組織及び HP による情報発信

発達障害児の性発達を支援するためのネットワーク作りのために、「長崎“障がい児・者の性”を考える教育研究会」を平成 22 年 9 月に発足し（現在会員 80 人）、年 4 回の研究会・情報交換会を開催し、その成果を HPhttp://www.nagasaki-sexuality.org/ と事務局通信で発信した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 28 件）

1. Morifuji K, Matsumoto T, Kondoh T, Nagae M, Sasaki N, Miyahara H, Honda S, Tanaka G,Moriuchi H, Nakane H：The relationship between physical signs of aging and social functions with Down syndrome in Japan, Acta Medica Nagasakiensia, 58:113-118,2014 査読有

2. 佐々木規子，森藤香奈子，松本正，宮原春美，長崎大学公開講座「遺伝について楽しく学ぼうＸ」の開催と評価，保健学研究，26, pp39-45，2014　査読有

3. 梅田亜沙子、恵藤絢香、岩永竜一郎、鈴木勝昭、辻井正次：広汎性発達障害児における感覚刺激への反応異常－日本版 Sensory Profile による評定－．小児の精神と神経. 53(4): 353-365, 2014　査読有

4. Iwanaga R, Honda S, Nakane H, Tanaka K, Toeda H, Tanaka G. Pilot study:efficacy of sensory integration therapy for Japanese children with high-functioning autism spectrum disorder. Occup Ther Int. 21(1):4-11. 2014 査読有

5. Kato F, Iwanaga R, Chono M, Fujihara S, Tokunaga A, Murata J, Tanaka K,Nakane H, Tanaka G: Relationship between sympathetic skin responses and auditory hypersensitivity to different auditory stimuli. J Phys Ther Sci 26:1087-1091, 2014　査読有

6. YASUHI Yasuko, MIYAHARA Harumi: Clinic-Based Sex education for Adolescent Girls Using Their Visits for The Purpose of HPV Vaccination. Japan Journal of Sexology, 31(7)：89-95,2013 査読有

7．森藤香奈子,佐々木規子,土居美智子,本村秀樹,森内浩幸,近藤達郎,松本正,染色体異常児家族が告知に望むもの　構造構成的質的研究法によるアンケート調査自由記載の分析，日本周産期・新生児医学会雑誌,49(1)，pp227-232,2013 査読有

8. Iwanaga R, Tanaka G, Nakane H, Honda S, Imamura A, Ozawa H: Detecting brain dysfunction in children with autism spectrum disorders when inferring the mental state of others using near-infrared spectroscopy, Psychiatry and Clinical Neurosciences, 67(4): 203-209, 2013 査読有

9. 梅田亜沙子，伊藤大幸，岩永竜一郎，萩原拓，谷伊織，平島太郎: 日本版青年・成人感覚プロフィールの標準化：信頼性および標準値の検討．臨床精神医学.42(6):789-796, 2013 査読有

10. 加藤寿宏、岩永竜一郎、太田篤志、日田勝子、永井洋一、山田孝、土田玲子：自閉症スペクトラム児の感覚・運動について－JPAN 感覚処理・行為機能検査を用いて－．日本発達系作業療法学会誌．2(1):8-13, 2013 査読有

11. 徳永瑛子、岩永竜一郎：自閉症スペクトラム児における JMAP スコアと 1 年後の

WISC-Ⅲの結果の関係性について．日本発達系作業療法学会誌．2(1):27-32, 2013 査読有

12. 徳永瑛子、岩永竜一郎：自閉症スペクトラム障害児者の感覚刺激に対する特異的な反応の加齢に伴う変化．日本発達系作業療法学会誌．2(1):33-38, 2013 査読有

13. 中込さと子，柊中智恵子，武田祐子，鈴木由美，佐々木規子，小笹由香 Genetic NUrsing：Harmony between Familu Nursing and Genetics/Genomics Nursing.日本遺伝看護学会誌，10:32-45,2012
査読有

14. 後藤由衣、小川陽大、藤樫舞子、丸山真由美、十枝はるか、岩永竜一郎：広汎性発達障害児を育てる親の障害受容とストレスの関係についての研究．日本発達系作業療法学会誌．1(1): 9-14, 2012 査読有

15 友枝恭子、岩永竜一郎、太田篤志：学齢期における感覚刺激に対する反応の年齢毎の違い．感覚統合研究．14:17-22. 2012 査読有

16. 中山茜、岩永竜一郎、十枝はるか：学校版感覚・運動発達アセスメントシートの開発～運動面に対するアセスメント～．感覚統合研究. 14: 35-40. 2012 査読有

17. 中山茜、岩永竜一郎、十枝はるか：学校版感覚・運動発達アセスメントシートを使った広汎性発達障害児の運動面の評価～パイロットスタディ～．感覚統合研究．14:41-46. 2012 査読有

18. 中山茜、岩永竜一郎、十枝はるか：学校版感覚・運動発達アセスメントシートの開発～感覚面に対するアセスメント～．感覚統合研究. 14:47-52. 2012 査読有

19. 中山茜、岩永竜一郎、十枝はるか：学校版感覚・運動発達アセスメントシートを使った広汎性発達障害児の感覚面の評価～パイロットスタディ～．感覚統合研究．14:53-58. 2012 査読有

20. 岩永竜一郎、川崎千里、十枝はるか：高機能自閉症スペクトラム障害児の感覚統合障害．感覚統合研究．14: 59-67. 2012. 査読有

21. **Mayumi Ohnishi, Rieko Nakao, Satomi Shibayama, , Yumi Matsuyama, Kazuyo Oishi, Harumi Miyahara:** Knowledge, experience, and potential risks of dating violence among Japanese university students: a cross-sectional study,*BMC Public Health* 2011, **11:**339doi　査読有

22. 宮原春美，佐々木規子，森藤香奈子，藤木卓，松本正，長崎大学公開講座「遺伝公開講座Ⅸ」の開催報告，保健学研究，24(1)：61-66，2011 査読有

23．佐々木規子，森藤香奈子，松本正，宮原春美，地域に根ざした遺伝カウンセリング体制構築に向けての検討（第一報），日本遺伝看護学会誌，　10(1)：70-77，2011．査読有

24．濱野香苗，森藤香奈子，佐々木規子，山﨑真紀子，宮原春美，井上晶代，松本正，遺伝公開講座Ⅶ「遺伝について楽しく学ぼう」の開催と評価, 保健学研究, 23(1) , pp.25-30, 2011．査読有

25. 岩永竜一郎、松坂哲應、本山和徳、松崎淳子、円城寺しづか、日野出悦子：3 歳児健診で発達障害児スクリーニング率の変化．長崎作業療法研究．6(1)：9-13,2011 査読有

26. 岩永竜一郎、松坂哲應、本山和徳、松崎淳子、円城寺しづか、日野出悦子：長崎県内の 1 歳 6 ヶ月 M-CHAT 導入による発達障害児スクリーニングの効果．長崎作業療法研究. 6(1)：15-19, 2011 査読有

27. 岩永竜一郎、谷口未央子、松坂哲應、本山和徳、松崎淳子、円城寺しづか、日野出悦子：3 歳児健診における発達障害児スクリーニングの効果. 長崎作業療法研究. 6(1)：21-31, 2011 査読有

28.和田健嗣　岩永竜一郎：5 歳児健診における発達障害児スクリーニングの評価システム構築および有効性の検討．長崎作業療法研究．6(1)：33-39, 2011 査読有

〔学会発表〕（計 9 件）

1. Tsubota S, Sasaki N, Miyahara H: Study on the experiences of expectant mothers of twins about their long-term hospitalization. ICM 30th Triennial Congress (Prague) 2014.6.1-6.5
2. 下村愉宇子，松本衣未，佐々木規子，宮原春美：出生前診断に関する大学生の意識調査-看護学生と一般学生の出生前診断に対する認識の違い. 第 27 回長崎県母性衛生学会(長崎), 2014.6.22
3. Ryoichiro Iwanaga, Atsushi Ohta, Toshihiro Kato Reiko Tsuchida, Katsuko Hida, TakashiYamada, Yoichi Nagai: Reliability and validity of the Posture and Equilibrium Abilities Area of the Japanese Playfulness Assessment Neurodevelopment (JPAN). 3rd European Congress of Sensory Integration,11-13June2014. Finland(Naantail)
4. 佐々木規子, 森藤香奈子，松本正，宮原春美，幼児を対象とした遺伝教育プログラムの実践報告，日本遺伝看護学会第 13 回学術大会琉球大学(沖縄県中頭郡西原町) 2013.10.25

5．佐々木規子，森藤香奈子，宮原春美：長崎県内島嶼部の保健師の遺伝相談の経験，日本遺伝看護学会第 12 回学術大会（岩手），2013.9.14

6．黒岩紀子、森田真理子、葛島浩右、葛島拓也、佐々木規子、森藤香奈子、宮原春美：特別な支援を必要とする子どもたちに対する性教育プログラム開発と実践.第 10 回長崎県小児保健学会（長崎）.2013.8.18

7. Harumi MIYAHARA.: Experiences of university students as conductors of peer education have long-term effects for them .THE 12th ASIA-OCEANIA congress of Sexology,Aug.2-5,2012,Matsue,Japan

8. 森藤香奈子，佐々木規子，宮原春美，松本正，子ども達の遺伝学習のまとめから今後の課題を考える「遺伝について楽しく学ぼう」学習方法の検討，日本遺伝看護学会第 11 回学術大会　2011.9.23（日本赤十字看護大学：東京都渋谷区広尾）

9．佐々木規子，森藤香奈子，宮原春美，松本正，地域に根ざした遺伝カウンセリング体制構築に向けての検討(第 3 報)地域住民と看護職への調査から見えてきた長崎県の現状，日本遺伝看護学会第 11 回学術大会　2011.9.23（日本赤十字看護大学：東京都渋谷区広尾）

〔図書〕（計 3 件）

1. 宮原春美：性教育学（荒堀憲二、松浦賢長編），障害児・障害者の性教育，pp136-138,朝倉出版東京, 2012.
2. 岩永竜一郎：もっと笑顔が見たいから（発達デコボコの子どもたちのための感覚統合），花風社、P213,2012
3. 佐々木規子，松本正，遺伝カウンセリングハンドブック 資料編 14．妊娠週数，母体保護法（関連部分抜粋），遺伝子医学 MOOK 別冊，pp394-395，2011.

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0　件）
○取得状況（計 0　件）

〔その他〕
ホームページ等
http://www.nagasaki-sexuality.org/
長崎“障がい児・者の性を考える”教育研究会

６．研究組織
(1)研究代表者
宮原　春美（MIYAHARA, Harumi）
長崎大学・医歯薬学総合研究科(保健学科)・教授
研究者番号：00209933
(2)研究分担者
岩永　竜一郎（IWANAGA, Ryoichirou）
長崎大学・医歯薬学総合研究科(保健学科)・准教授
研究者番号： 40305389
佐々木　規子（SASAKI, Noriko）
長崎大学・医歯薬学総合研究科(保健学科)・助教
研究者番号： 90315268